

# 障害のある子どもと「ともに楽しむ」実践と「チーム学校」の充実

## －「トータル支援」の実践と「向かう力」により育まれるもの－

**企画者・司会者** 浦崎武（琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター）  
**話題提供者** 崎濱朋子（読谷村立古堅小学校）  
武田喜乃恵（琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター）  
大城麻紀子（沖縄県立鏡が丘特別支援学校）  
村上公也（キミヤーズ塾）  
**指定討論者** 別府哲（岐阜大学教育学部）  
湯浅恭正（中部大学現代教育学部）  
**「ともに楽しむ」実践、「向かう力」、チーム学校**

### 【企画趣旨】

文部科学省は多様化・複雑化する子どもたちの状況への対応や学校教育の質的充実に対する社会的な要請の高まりから、教員の専門性の向上だけでは対応が困難になっており、多様な専門スタッフの配置・様々な業務の分担や専門機関との連携を図るなど、「チーム学校」として職務を担う体制を整備する必要があると提言している。（チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について〈中間まとめ〉）

そのような中、平成28年4月に障害者差別解消法が施行され、学校でも障害のある子ども障害のない子どもともに過ごしともに学ぶインクルーシブ教育システムの構築が強く求められるようになった。このことは、小学校や中学校における通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった連続性のある「多様な学びの場」を用意することや、同じ場でともに学ぶことを追求すること等が法的にも求められるようになったことを意味する。

琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センターでは「トータル支援プロジェクト」として障害のある子どもたちの集団支援教室を実施してきた。子どもを部分や一側面で捉えず、全体性で捉える支援、そしてその全体性を捉えるために「他者との関係性」の状況や文脈の把握やその「関係性」の展開の視点をもつ支援を「トータル支援」と呼んで大切にしてきた。それは能力の獲得のみを目指すのではなく、能力があってもなくても、障害のある子ども障害のない子ども「ともに過ごし、ともに楽しむ」ことを目指すインクルーシブ教育や学生、教員、保育士、心理士等多様な領域や立場の人が同じ土俵で子どもと関わり、理解を深め対応についてそれぞれの視点で考える「チーム支援」を大切にしてきた。

トータル支援では子どもたちと「どこで楽しむ」、「誰と楽しむ」、「何を使って楽しむ」等を考えながら支援企画や授業を実践する。その実践を通して「楽しみ」が生じる「場」が生まれ他者と「ともに過ごす」ことで、「楽しんでいる人」と「楽しんでいる人」が「場」を共有することにより自ずと子どもたちが他者へと開かれ「他者との関係性」が育まれ、「ともに楽しむ」という相互の関わり合い、交じり合いが豊かになっていくプロセスが捉えられるようになる。子どもがトータル支援の「場」で他者と「ともに楽しんでいる」様子を観た親や見学に来た先生が、普段、上手くできずに避けてしまうことに取り組む姿に驚いたり、到底できないことだと思っていることができている姿に感動したりすることがしばしばある。次第に親や先生も楽な気持ちで子どもたちを見るようになっていった。私たちスタッフは子どもたちが「向かう方向性」や「向かっている」を捉えることを大切にしてきた。そしてそこへと向かう子ども

たちの内側からの力を「向かう力」と呼ぶようになった。

子どもたちはトータル支援の「場」において「誰かとともに過ごすこと」で育まれる「向かう力」により、物や人へと「向かい」、「誰かと何かを共有し」、物や人との関係性を膨らませる体験を積んでいく。その結果として、取り組みのなかで生じる強い意欲、意図、「生きるための希望」と「向かう力」がより強いものとなっていく。

本シンポではトータル支援に基づく報告を通して子どもたちの「いま、ここ」に関わる「人」のあり方に目を向け、「他者との関係性」に基づく「ともに楽しむ」体験の意義について考えたい。また「多様な学びの場」を用意すること、同じ場でともに学ぶことを追求することや「チーム学校」に基づき多様な専門スタッフの配置・様々な業務の分担や専門機関との連携を図ることによる意義を考えたい。

そして最後に、トータル支援の実践報告を通して子どもたちの育ちと学び、「生きるための希望」と結びつく「向かう力」を育む支援・教育の在り方について考えたい。

### 【話題提供者の趣旨】

他者との関係性を生み出す「豊かな場」、「他者との関係性」を基盤とした「取り組みの魅力」、ともに楽しめる「場の雰囲気」が醸成される集団支援と教育実践について、武田が報告する。また多様な専門スタッフの配置・様々な業務の分担や専門機関との連携を図る「チーム学校」による取り組みを崎濱が報告する。次に院内教室における余命の宣告を受けた子どもとの実践を通して、「トータル支援」で行ってきた理念や実践に基づいた教育実践の意義について大城が報告する。

最後にキミヤーズの実践を通して子どもの「できなかったことができるかもしれない」という手応え「やってみよう」という意思、「結果としてできるようになった」達成感や充実感等子どもの豊かな体験を生み出す実践を報告する。

トータル支援の特徴は、子どもを「できないことができる」ようにするための支援者主導の支援・教育ではなく、「いま、ここ」を「ともに楽しむ」ことによる子どもたちの主体的な「向かう力」が育まれることを大切にしたい支援・教育を行うことである。そして、その結果として、子どもたちの育ちと学びが促進されるプロセスを重要視してきた。

本シンポでは、「できないことができる」ようになることを早急に求めず、できなさを抱ながら「いま、ここ」を「ともに楽しむ」ことで「向かう力」を育む実践を報告する。

別府氏、湯浅氏からはこのような実践の意味と課題について指定討論を行う。

(URASAKI Takeshi, SAKIHAMA Tomoko, TAKEDA Kinoue, OSHIRO Makiko, MURAKAMI Kimiya, BEPPU Satoshi, YUASA Takamasa)